

坂の下の雲と沈む太陽

昨年末の12月30日、新経済戦略が発表されました。これは気の抜けた、沈む太陽「坂の下の雲」ではないか。

前文より

「私たちは今、長い衰退のトンネルの中にいる。国全体が輝きを失いつつある」これほど悲痛な政府方針の書き出しが過去にあっただろうか。「美しい国」でも、「とつもない日本」でもない。

現実の日本の姿である。

そして、ここに至った道のりを振り返っている。

「戦後、日本は奇跡の経済成長を成し遂げた。アメリカという目標があった。経済大国を目指すという共通目標に向かって総力を挙げた。その結果が、世界第二位の経済大国の実現だった」米国を素直に手本としていればよかつた時代。戦後の「規格大量生産」には、辛抱強く、協調性と共通知識があり、個性と獨創性のない人が強く求められた。

ところが「坂の上の雲を夢見て山を登り、その頂きに立った途端、この国は目標を見失った」と、鳩山新成長戦略の前文はため息をつくかのように書き綴る。

官僚支配体制の行き詰まりと、必要なはずのその変革に手をつけられないこれまでの政権時代は移り変わり、過去の成功法則が通用しなくなっても、

デフレ脱却が主軸



となってきたのは、二つの道による成功体験である「新成長戦略はそう指摘し、呪縛となったその二つの道を説明している。

延々と同じことを繰り返す愚が、事態をいっそう深刻にした。

「我が国の経済政策の呪縛」

「第一の道は、公共事業による経済成長だ。戦後から高度成長期にかけて、有効だった。80年代、インフラが整ってくると、大都市の税収を画一的な公共事業で地方に配分する仕組みが、政治家と官僚による税金のピンハネ構造を生み出した。農村の雇用維持や都市との格

差縮小にはつなげたが、地域独自の経済・生活基盤を喪失させ、巨額の財政赤字を積み上げた」

「第二の道が供給サイドの生産性向上による成長戦略だ。選ばれた企業のみが集中し、中小企業の廃業は増加。国民全体の所得も向上せず、実感のない成長と需要の低迷が続いた」

自民党の公共事業重視政策と、小泉・竹中の新自由主義的経済路線を、二つの呪縛とし、「私たちは第三の道を進む」と宣言している。

「2020年までに環境、健康、観光の三分野で100兆円超の新たな需要を創造して雇用を生み、国民生活の向上に主眼を置く。地球規模の課題を解決する課題解決型国家として、アジアと共に生きる国の形を實現する。世界最高水準の低炭素型社会の實現に向けて、社会全体が動き出すことにより、新しい需要が生まれる」公共事業重視の「途上国型」から訣別し、「課題解決型国家」となるというビジョンが打ち出されている。

環境など、世界的課題を解決する。「日本が世界に先駆けて課題を解決するモデル国となることは、我が国の研究開発力や企業の体質の強化に直結する」

すべては、デフレからの脱却なくして成長なしです。アジアと環境ではない。財務官僚の支配下から抜け出さない限り、国家の未来はない。

国家国民の劣化現象が、誰の目にも明らかになった。「国全体が輝きを失いつつある」という厳しい現状認識を、出発点としたことが皮一枚残し、かすかな望みと希望を、感じるので。

(有)西川経営オフィスサービス

中村会計

事務所便り

2010年1月8日 (金) N092

地域から明るい未来を作ろう

メデアは真実を伝えない
今年には安保改訂50年